

論理的思考力を育成する小学校国語科授業の設計

－小学校5年生の実態調査から－

原 田 義 則 [鹿児島大学教育学系 (国語教育)]

Design of elementary school national language classes to train logical thinking ability:

Analysis of actual state survey of elementary school fifth grade students

HARADA Yoshinori

キーワード：全国学力調査、実態調査、思考語彙、「ペンタゴン・ロジック」

1. 最近の全国学力調査における指摘事項

国立政策研究所が毎年公開している全国学力調査(小学校6年生・中学校3年生対象)の「調査結果」⁽¹⁾には近年、論理的思考力に関する指摘事項が次のように続いている。(下線は稿者)

- ・【平成 27 年度 全国学力・学習状況調査の結果(概要)「中学校国語」】

「根拠を明確にして書く点に、依然として課題がある」

- ・【平成 28 年度 全国学力・学習状況調査の結果(概要)「中学校国語」】

「自分の考えを書く際に、根拠を示すことは意識されているが、根拠として取り上げる内容が適切かどうかを吟味したり、どの部分が根拠であるかが明確になるような表現上の工夫をしたりすることに、依然として課題がある」

- ・【平成 29 年度 全国学力・学習状況調査の結果(概要)「中学校国語」】

「伝えたい事実や事柄について、根拠として取り上げる内容が適切かどうかを吟味する点に、依然として課題がある」

- ・【平成 30 年度 全国学力・学習状況調査の結果(概要)「中学校国語」】

「目的に応じて文章を読む際などに、情報を整理して内容を的確に捉えることに課題がある」

共通しているワードは、「根拠」「情報」「事実や事柄」の「整理」や「吟味」であり、相手に応じて論理的に思考し表現することに課題があることを指摘しているのである。

小学校の結果報告書にも同様の指摘が続く。

- ・【平成 29 年度 全国学力・学習状況調査の結果(概要)「小学校国語」】

「目的や意図に応じて、必要な事柄を整理して書いたりすることに課題がある。また、具体的な叙述を基に理由を明確にして、自分の考えをまとめることにも課題がある」

- ・【平成 30 年度 全国学力・学習状況調査の結果(概要)「小学校国語」】

「複数の資料の内容を関係付けて理解したり、表現したりすることに課題がある」

一見すると、「必要な事柄」「叙述」「複数の資料の内容の関係付け」は、中学校の指摘と違うよう

に思われるが、いずれも「事実や事柄」の「整理」に課題がある点が共通する。

では、鹿児島県の実態はどうか。鹿児島県教育委員会は、県内の全小中学校に在籍する小5～中2を対象とした「鹿児島学習定着度調」においても同様の指摘をしている。(2) (下線は稿者)

・【平成27年度 鹿児島学習定着度調査結果 (概要)】

「思考・表現」については、一定の成果が見られたものの、小5では文章や図、表、写真などと関連付けながら読むことに課題がある。

・【平成29年度 鹿児島学習定着度調査結果 (概要)】

「思考・表現」の問題に関しては、図、表、グラフ、資料等を関連付けたり、根拠を基にして自分の考えを記述したりする問題、習得した知識・技能を日常生活の場面で活用していく問題等について、通過率が低く、無解答率も高くなっている。

各種調査が、同様の指摘を繰り返している。「情報」を適切に取り扱い、相手や目的に応じて筋道立てて考え表現できる力、すなわち論理的思考力を育成する国語科の授業設計は、全国や本県においても、喫緊の課題であることが分かる。本研究では、まず小学校に焦点を当て進めていく。

2. 論理的思考力を育成する国語科授業設計のための視点

2.1 「根拠」と「事例(事実)」と「理由」の区別

論理的思考の出発点は、各種情報の中から自分の主張を支える「根拠」を選択することである。つまり「根拠」は、主張すべき「考え」や「意見」を支える概念であることを示している。ところが、昨今の全国大会レベルの実践発表においても、「根拠・事例(事実)」、「根拠・理由」が併記され、まるで同義のように取り扱われている発表を見聞きした。このような混乱の中では、論理的な思考力を育てる国語科授業の設計について、論を進められない。

そこで本稿では、まず新学習指導要領(平成29年公示)に掲載された「情報の扱い方に関する事項」及び現行の学習指導要領を丁寧に検証し、「根拠」と「事例(事実)」や「理由」の関係について明らかにする。

【表1 「新学習指導要領(平成29年公示)「情報の扱い方」(表及び下線は稿者)】

	学年	「情報と情報との関係」	「情報の整理」
小 学 校	第1学年及び 第2学年	ア 共通、相違、事柄の順序など情報と情報との関係について理解すること。	
	第3学年及び 第4学年	ア <u>考え</u> とそれを支える <u>理由</u> や <u>事例</u> 、全体と中心など情報と情報との関係について理解すること。	
	第5学年及び 第6学年	ア 原因と結果など情報と情報との関係について理解すること。	イ 情報と情報との関係付けの仕方、図などによる語句と語句との関係の表し方を理解し使うこと。

中 学 校	第1学年	ア 原因と結果， <u>意見と根拠</u> など情報と情報との関係について理解すること。	イ 比較や分類，関係付けなどの情報の整理の仕方，引用の仕方や出典の示し方について理解を深め，それらを使うこと。
	第2学年	ア <u>意見と根拠</u> ，具体と抽象など情報と情報との関係について理解すること。	イ 情報と情報との関係の様々な表し方を理解し使うこと。
	第3学年	ア 具体と抽象など情報と情報との関係について理解を深めること。	イ 情報の信頼性の確かめ方を理解し使うこと。

【表2「現行学習指導要領(平成20年公示)「B 書くこと」「C 読むこと」】(表及び下線は稿者)

	学年	「B 書くこと」	「C 読むこと」
小 学 校	第3学年及び 第4学年	ウ 書こうとすることの中心を明確にし，目的や必要に応じて <u>理由や事例</u> を挙げて書くこと。	イ 目的に応じて，中心となる語や文をとらえて段落相互の関係や <u>事実と意見との関係</u> を考え， <u>文章を読むこと</u> 。
	第5学年及び 第6学年	ウ <u>事実と感想，意見</u> などとを区別するとともに，目的や意図に応じて簡単に書いたり詳しく書いたりすること。	イ 目的に応じて，文章の内容を的確に押さえて要旨をとらえたり， <u>事実と感想，意見</u> などとの関係を押さえ， <u>自分の考えを明確</u> にしながらかんたりにすること。
中 学 校	第1学年	ウ 伝えたい <u>事実や事柄</u> について， <u>自分の考えや気持ちを根拠を明確にして</u> 書くこと。	エ 文章の構成や展開，表現の特徴について，自分の考えをもつこと。
	第2学年	ウ <u>事実や事柄，意見や心情</u> が相手に効果的に伝わるように，説明や具体例を加えたり，描写を工夫したりして書くこと。	ウ 文章の構成や展開，表現の仕方について， <u>根拠を明確にして自分の考えをまとめ</u> ること。

表中の下線部に注目したい。小学校では「理由や事例」が「考え」「感想」を支える概念として記載されている。中学校の「意見」と「根拠」の関係も同じである。小・中の系統性を鑑みた時に小学校の「考え」「感想」と中学校の「意見」が同じ概念を指す言葉だとすると，小学校「理由や事例」と中学校「根拠」が同一と考えるのが自然であろう。つまり，「考え・感想・意見」と「根拠」（「事例・事実」）という構図になることが分かる。

具体的に考察してみよう。例えば，鹿児島県在住の児童が書いた，㊦「修学旅行は熊本に行きたい」（意見），㊧「熊本城があるから」という文章があったとする。この例では，㊧の文章は「根拠」ではあるが，「事例」でもあるし「理由」のような気もしてくる。つまり，「根拠」には「事例」＋「理由」が含まれていることが分かる。

ところが小学校中学年では，新学習指導要領でも，現行学習指導要領でも「事例」と「理由」を分けることが求められている。先の文ならば，㊦「修学旅行は熊本に行きたい」（意見），㊧「熊本城がある」（事例）に加えて，㊨「（鹿児島県に住んでいる私は）大きな城を見たことがないので，一

度見てみたいから」(理由)とした時に、初めてその違いが明確になる。論理的思考力を育む授業を実現していく際には、まずは小学校において「事例・事実」と「理由」を区別させることを徹底させることが肝要であろう。

ちなみに高校2年生を対象とした「特定の課題に関する調査(論理的な思考)～21世紀グローバル社会における論理的に思考する力の育成を目指して～」(平成25年3月 国立教育政策研究所教育課程研究センター調査結果)では、資料等から「事実」を把握する設問において、約4割の生徒が通過できていないことを報告している。⁽³⁾ この結果を受け、同書の巻末には「国語科の学びとして『論理的な思考』を育むための条件」と題し、「事実の把握」が提示されている。

では、現在の小学校段階で「事例」と「理由」を区別することが、どの程度習得されているのだろうか。

2.2 「根拠」の「吟味」

全国学力調査の「中学校国語 調査結果」で繰り返し指摘されてきた内容に、「根拠として取り上げる内容が適切かどうかを吟味することに課題がある」(平成28年度)、「伝えたい事実や事柄について、根拠として取り上げる内容が適切かどうかを吟味する点に課題がある」(平成29年度)がある。言い換えると、小学校において「考えや意見」「事例」「理由」を明確にすることは習得しているが、その妥当性を「吟味」する学習には至っていないことが考えられる。そもそも、小学校においては、「吟味」は必要なのか。

そこで、本県が採用している現行の小学校教科書を分析し、状況を確認したい。実は、M社6年教科書「意見を聴き合って考えを深め、意見文を書こう」(教材「未来がよりよくあるために」)では、以下のようなモデル文が示され、自分の「意見」を支える「理由」について他者からの質問を想定し、反証していく学習展開が組まれている。児童はこのプロセスの中で、「吟味」を繰り返すように仕組まれているのである。少し長くなるが、小学6年生に求められているレベルを確かめるためにも、全文⁽⁴⁾を引用する。(下線は稿者)

えがおは、よりよい未来への第一歩

岸本 良太

平和な暮らしが、ずっと続くこと。これは、よりよい未来に欠かせないことだ。そのためには、身近な人がえがおでいること。ぼくは、これが平和への第一歩であり、よりよい未来への第一歩だと考える。

夏休みに、テレビで終戦記念日のニュースを見た。戦争当時の様子が画面に流れたとき、ぼくは、家族や友達、先生方と過ごす毎日は平和のおかげなのだと実感した。今の平和な暮らしは、自分たちが努力して守っていかねばならないものなのだ。

平和であるために、自分に何かできるだろう。そう考えて、ノーベル平和賞を受賞したマザー=テレサの本を読んだ。その中の「平和はほほえみから始まります」という言葉が印象に残っている。これは、平和というのは、身近な人のえがおを願う気持ちから始まる、という意味だとぼくは思う。平和というと、何か大きくて難しいもののように感じるけれど、このように、身近なことから考えることができるのだ。

ただ、人のえがおと平和とが、すぐには結び付かない人もいるだろう。確かに、ぼくの周りの人だけがえが

おでいても、それがそのまま平和につながるとは感じにくい。しかし、世界中の人が、それぞれに身近な人のえがおを願うならば、それは平和につながることはないだろうか。

今も、世界には、決して平和とはいえない地域がある。そのような場所で、子どもたちの健康や命を守る活動をしている「ユニセフ」という団体があることを、最近知った。そのホームページには、争いが起きている地域の子どものえがおの写真がのっている。「ユニセフ」の活動は、こんなえがおを増やしていく活動なのだろう。ぼくはその写真を見て、世界中のどんな場所であっても、えがおが増えれば平和につながるのではないかと思った。

今の平和な暮らしがずっと続いてほしい。そして、平和な場所が、少しでも増えてほしい。ぼくにできることは、周りの人たちがえがおにすることであり、ぼくもえがおでいることだ。単純なことに聞こえるかもしれないが、それが平和につながり、よりよい未来につながっていくのだと思う。

このモデル文の主題は、題名や冒頭に書かれている「平和な暮らしが、ずっと続くためには、身近な人が笑顔でいることが第一歩である」である。この「意見」に説得力を持たせるために、本文では第1の事例として「終戦記念日のニュース」「マザー=テレサの本」を挙げ、説明をしている。ただ、4段落目からは「人のえがおと平和とが、すぐには結び付かない人もいるだろう。」と反論を自分で予想し、それに対する新たな説明を導くために、第2の事例「ユニセフ」を取り上げている。つまり、「マザー=テレサの本」から「えがお」というキーワードを取り出し、「ユニセフ」から「えがおを増やす活動」というキーワードを取り出して、比較・関係付けを行っている。そしてモデル文の冒頭で主張した「身近な人がえがおでいること」を、最後の段落でも繰り返して、双括型の意見文として完成させている。加えて、教科書では「説得力のある意見文を書く」ために大切な点として、「事実と意見が区別できているか」「ことなる考えや反論を取り上げて、それに対する自分の考えも入れる」ことが明記されている。

すなわち現行の授業でも、反論を自分で予想し説明を加えていく過程で、取り上げた「事例」や「理由」について「吟味」することを促しているのである。

しかし、一方で次のような疑問が湧く。小学校段階で質問を想定し反証することが、どの程度可能なのだろうか。また、モデル文の中で用いられていた「比較・関係付け」のような思考方略を、児童は使用できるのだろうか。

3. 小学校5年生を対象とした実態調査から

前述した疑問解決の糸口を見つけるために、県内の5年生（3学期時点）を対象にした、簡易な調査を実施した。これは、現行教科書でも、中学年において「考え・意見」と「事例」・「理由」を分ける学習していることに着目したからである。一方で、前掲の「未来がよりよくあるために」の学習前であるため、調査問題をモデル文の型に寄せたり、取り上げる話題を身近なものに設定したりするなど、できるだけ簡易な調査用紙を作成⁽⁵⁾した。なお、結果処理に当たっては、多忙の中、調査実施者（担任）に時間を割いてもらい、稿者との相談により客観性の確保に努めた。記して謝辞としたい。

3.1 調査の概要

○ 目的

- ・ 小学校5年生が「事実」と「理由」を書き分けることができるかどうか、明らかにする。
- ・ 小学校5年生が他者からの質問を想定し、反証することができるかどうか、明らかにする。
- ・ 回答に使用した語彙に着目し、そこから想定される思考方略について明らかにする。

<例> 使用された語彙「比べると」→思考方略は「比較」と判定

使用された語彙「もし～ならば」→思考方略は「仮定」と判定

○ 対象 鹿児島県内の小学校5年生 合計175名

○ 調査・結果処理方法

- ・ 児童が抵抗なく調査に臨めるように、教科書モデル文の型を踏襲しつつ、「主張」→「根拠」→「事実」と「理由」に分別→「想定される質問」→「説明」→「再主張」と書き進めていけるような調査問題を作成した。なお、記名式とし、45分間の中で実施・回収した。
- ・ 第一次分析として、担任が回答内容を客観的に判断し、エクセルデータ化する。
- ・ 第二次分析として、稿者が回答内容と処理されたデータを照応させ、不明点については担任に確認。

○ 実施時期 平成30年1月～2月

○ 質問調査用紙(例)

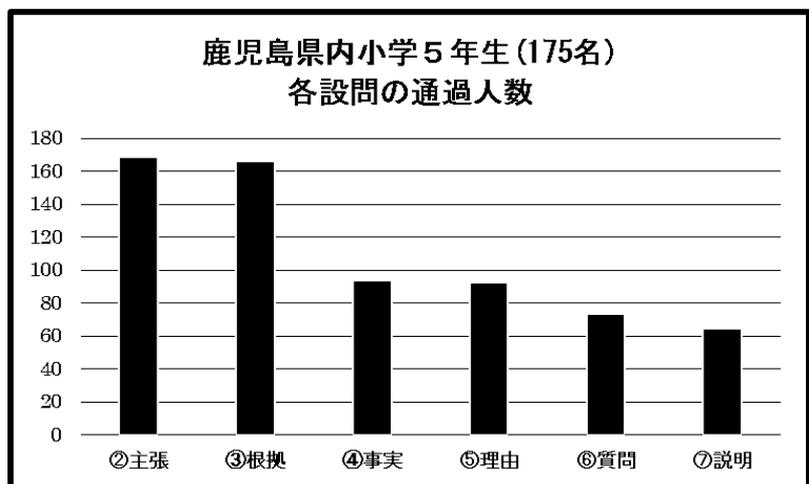
<問題例>

- ①「問題」今年の修学旅行は宮崎か熊本に行きます。あなたはどちらに行くべきだと思いますか。
- ②「主張(答え)」・・・自由記述
- ③「根拠(なぜ)」・・・自由記述
- ④「事実」・・・自由記述
- ⑤「理由」・・・自由記述
- ⑥「予想される質問」
- ⑦「予想される質問に対する説明」
- ⑧「再主張」

3.2 調査結果

・ 調査結果1 (各設問の通過人数)

番号	通過人数	通過人数 (%)
②	168人	96%
③	166人	95%
④	93人	53%
⑤	92人	52%
⑥	73人	41%
⑦	64人	36%



・各設問を「通過」した回答例（児童A）

②	わたしは、熊本に行くべきだと思う。
③	熊本のさい害を見て、熊本のさい害のすごさを調べるため。
④	熊本城を見ることができる。
⑤	熊本のさい害の大きさを考えると、 <u>熊本の人だけが悲しい思いをするのではなく、鹿児島も分かち合っていないと、考えたから。</u>
⑥	でも、鹿児島わたしたちが、熊本のさい害を調べても意味があるのだろうか。
⑦	<u>確かに、</u> 鹿児島の方が調べても意味がない、と考える人がいるかもしれない。でも、同じ九州で、となりの県として、熊本に見に行ったり調べたりすることは大切だ。

・各設問を「通過」した回答例（児童B）

②	わたしは、熊本に行くべきだと思う。
③	グリーンランドなどの遊園地があり、楽しそうだからです。
④	熊本城や遊園地がある。新幹線も通っている。
⑤	友達と新幹線に乗ったり、熊本城や遊園地に行けるとなると、わくわくして楽しくなってくると思うからです。
⑥	でも、宮崎では勉強ができるのではないかな。
⑦	<u>確かに、</u> 宮崎では勉強ができるところがある、と考える人がいるかもしれませんが。でも、 <u>勉強の後に、とっても楽しい遊園地などにみんなで行くことを楽しみにしている人の方が多いと思います。</u>

・設問⑤を「通過していない」回答例（児童C）

②	わたしは、熊本に行くべきだと思う。
③	<u>熊本のグリーンランドは、鹿児島とちがうから。</u>
④	熊本には、グリーンランドがあります。
⑤	鹿児島島のグリーンランドと熊本のグリーンランドを <u>比べてみたい。</u>

※ ⑤が③を支える「理由」になっていない。

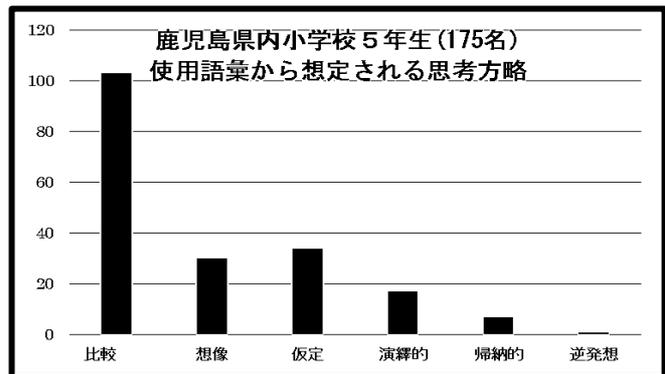
・設問⑦を「通過していない」回答例（児童D）

②	わたしは、熊本に行くべきだと思う。
③	熊本城があり観光できると思うからです。
④	熊本城がある。観光できるところもある。
⑤	宮崎県と比べて、観光できる場所や、城の歴史をたくさん勉強ができそうだと思うからです。
⑥	宮崎にもたくさん遊べるところがあるんじゃないの？
⑦	確かに、宮崎にも楽しいところがあると考える人もいます。でも、熊本には楽しく遊べて観光できるところがあります。

※ ⑦が⑤の繰り返しになっている。

・調査結果2（使用された思考方略）⁽⁶⁾

思考方略	使用語彙(例)	使用人数(人)	使用人数(割合)
比較	比べると	103人	59%
想像	と思う 予想する	30人	17%
仮定	もし	34人	19%
演繹的	例えば 具体的に	17人	10%
帰納的	つまり まとめると	7人	4%
逆発想	反対の視点 から	1人	1%



※回答例(1) 上記の児童Aの場合、下線部の「鹿児島も分かち合っていないと考えたから。」という文や、その後の文脈から、「比較」していると判断した。

※回答例(2) 上記の児童C・Dの場合、設問全てを通過していないが、下線部の「鹿児島と違う」「比べてみたい」や「宮崎県と比べて」という語彙を使用していることから、「比較」していると判断した。

※回答例(3) 上記の児童Bの場合、下線部の「みんなで行くことを楽しみにしている人の方が多いと思う。」という文や、全体の文脈から、「想像」していると判断した。

3.3 調査結果の考察

(1) 「事実」と「理由」を書き分けることができるか

ほとんどの児童が、「修学旅行は、熊本県(宮崎県)に行きたい」と「主張」し、その「根拠」を書いていた。これは、調査実施者である、学級担任の動機づけも大きく作用したと考えられる。

一方、「根拠」を改めて見直し、「事実」と「理由」に分けることかできた児童は、約半数であった。これらの児童は、前述した児童A・Bの回答例にもあるように、文末に留意した回答ができていた。例えば、「事実」は「・・・である」と言い切り、「理由」の文末は「・・・だと思うから」と結んでいる。

通過できていない児童は、「根拠」・「事実」・「理由」のいずれも「熊本城(青島)があるから」としたり、児童Cのように調査の趣旨を理解しないまま、思い付いたことを書き加えたりしていた。もちろん、このような調査を受けることが初めてであった、ということも大きく影響していたことは無視できない。しかし、調査を実施した担任からの「調査前に十分に説明したが、戸惑う子どもがいた」「調査用紙に書いてあった、『事実→・・・があります』や『理由→・・・と思ったから、考えたから』を参考にさせたが難しかった」という声も無視できない。ある担任の「現在でも、意見と事実やデータとを分けて読んだり書いたりする授業はしているはずだが、十分に定着していない」という感想が印象深い。

以上のことから、小学校5年生において、「事実」と「理由」を書き分けることは可能であると考えられる。しかし、「事実」や「理由」といった学習語彙の定着、文末表現の違いについての理解等について、定着させることが前提となることが明らかになった。

(2) 反証することができるか

小学校5年生の段階で、一旦完成した文章を「吟味」し、個人内で反証することができるか。上述した通り調査対象の児童が学習するのは、第6学年においてである。したがって、通過率は大変低いと予想をしていたが、約4割の児童が通過していた。この数値をどのように見るのか。今後、第6学年児童を対象にした調査を実施し、その結果と比較しないと分からないが、当初の予想より高い数値であった。

通過した回答を分析すると、先述した「文末表現」への着目に加えて、児童A・Bの回答にも見られるように、「接続詞」に着目できたことがうかがえた。通過した回答は、共通して接続詞を上手く使いこなせていた。

また、話題が「修学旅行」「熊本」であったことも大きいと考える。例えば、設定した話題が児童の実態とかけ離れた「世界の情勢」であったらどうであろう。回答は、全く進まなかったのではなかっただろうか。つまり、話題に関する知識を持ち合わせていたため、個人内の反証が成立したとも考えられる。

以上のことから、現段階では小学校5年生において、反証を行うことは一部の児童において可能である。ただし、「接続詞」や「文末表現」の提示や、知識を有している話題設定等の条件整備が必要であることが分かった。

(3) どのような思考方略を用いているのか

回答中に「比べると」「例えば」等の記述があり、思考方略が明確に判定できるものだけを選択した。したがって、他の数値と比べて全体的に低くなっている。その中でも、約6割の児童は「比較」していることが分かる。これは、話題の内容も影響しているが、「比較」は低学年から慣れ親しんできた思考方略であると考えられる。ちなみに「現代日本語書き言葉均衡コーパス（通常版）BCCWJ-N中納言」（<https://chunagon.ninjal.ac.jp/bccwj-nt/search>）による2001～2008年の小学校教科書検索では、「比べると」という語句は1年生の図画工作科や国語科の教科書から出現し始め、全教科書中では、合計71件ヒットした。同システムで、「例えば」を検索すると、2年生の算数科の教科書から出現し始めるが、合計13件であった。確かに、検索対象の教科書は現行のものとは違うが、教科書編集規則の大幅な変更は無いため、使用語彙が大きく変更されたとは考えにくい。「中納言」による検索数は、一つの基準値として有効であろう。つまり「比較」は、小学校で頻繁に用いられている、思考方略だと推測できる。

一方、同システムによると「予想」（想像）は、小学校2年生算数科から出現し始め、合計31件であった。本調査の自由記述で、使用している児童は約2割程度と少なかった。「事実」から、「予想・想像」していくことは、論理的に思考する上でも必要な方略の一つであろう。これら思考語彙の日常的な使用状況については、今後の本格的な調査を実施する上での留意点としたい。

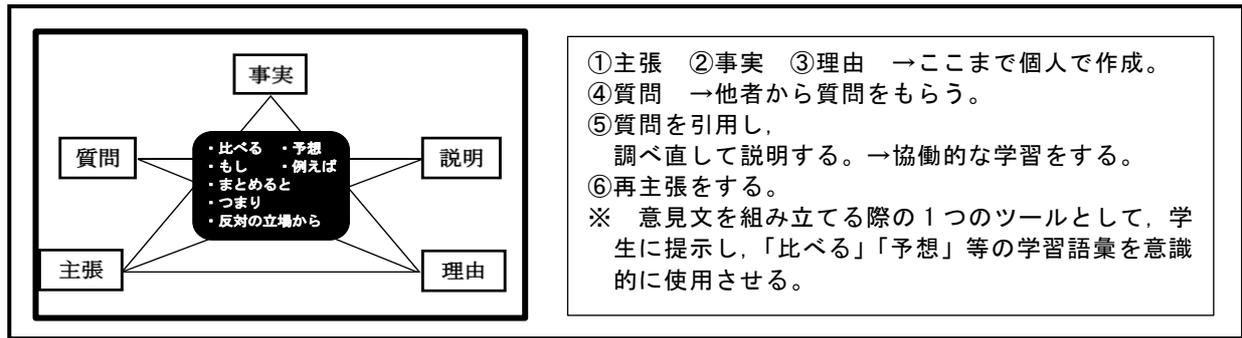
4. 論理的思考力を育成する国語科授業についての一考察

以上のことから、論理的思考力を育成する小学校国語科授業設計上のポイントを整理する。

- ① 論理的思考力を高める国語科授業では、「考えや意見」「事実」「理由」等の学習語彙を定着させ、それらを区別することができるような指導を継続することが大切である。
- ② 論理的思考力を高める国語科授業では、「考えや意見」を支える「事実」や「理由」の「吟味」が必要である。そのためには、小6教科書にあるように、他者からの質問を想定した反証を行うプロセスが有効であるが、「接続詞」や「文末表現」の明示や、児童が知識を有している話題の設定が大切である。
- ③ 多様な思考方略と結びつく学習語彙を定着させ、日常的に使用させることが大切である。

現在、「根拠（事実・データ）・理由（事実・データの解釈・主張）」の三点セットを方略として授業に持ち込んだ実践例が数多く紹介されている。⁽⁷⁾ これらの実践例は、思考を整理し表現する過程を保証している。今後参考にしたいが、本稿で明らかにした「学習語彙の定着」・「質問の想定及び反証を通した吟味」にも重点を置きたい。例えば、思考語彙や思考の道筋を視覚化したり、他者と協働的に意見文を書く場面を設定し、十分に「吟味」させたりすることが考えられる。その際に出発点としたいのが、原田（2017）⁽⁸⁾ で挙げたニュース・ペーパーバトル（以下「N・P・B」と表記）である。下図に示した「ペンタゴン・ロジック」⁽⁹⁾（原田2017）を、意見文構築のためのアイテムとし、各自で選択した新聞記事を対象にして意見文を綴らせ、他者に紹介し合うという授業方

法である。現在、専門学校生を対象にした授業において検証を重ね、有効であることが分かってきている。(10) 詳細は、別の機会に譲りたい。



【図1:「ペンタゴン・ロジック」】

今回、簡易な調査ではあったが、担任と多くの時間を共有する中で3つのポイントが明らかになった。今後は、本稿を礎としつつ、本格的な実態調査に取り組む。また、これまで提言してきた「ペンタゴン・ロジック」及び「N・P・B」を出発点とする、論理的思考力を育成する小学校国語科授業の設計について、研究を進めていく。

註(1) 国立政策研究所「全国学力調査」(<https://www.nier.go.jp/kaihatsu/zenkokugakuryoku.html>)

(2) 鹿児島県教育委員会(<https://www.pref.kagoshima.jp/kyoiku/>)

(3) 同調査は、高校生の論理的に思考する力の状況を把握・分析し、今後の高等学校教育等の改善充実に役立てることを目的として、平成24年に全国の国公立立高等学校合計160校 第2学年約5,500人を無作為抽出し国立教育政策研究所として初めて実施したものである。

(4) 光村図書『国語六 創造』,平成26年3月,P.98-99

(5) 調査問題については、梅嶋真樹・仁藤亜里・斎田有里・日本論理コミュニケーション技術振興センター『論理コミュニケーション The Logical Communication』(慶応義塾大学出版会,2011)を参照し、小学生にも分かり易い形式や話題設定に変更して、実施した。

(6) 思考方略の分類については、井上尚美・大内善一・中村敦雄・山室和也『論理的な思考力を鍛える国語科授業方略』(溪水社,p.167-168)を参照にして、稿者が組み立て直した。

(7) 鶴田清司・河野順子編著『論理的思考力・表現力を育てる 言語活動のデザイン 小学校編』,明治図書,2014 に詳しい。

(8) 原田義則・上原孝夫・永野祐樹「国語科授業における論理的思考力の育成—協働的学習の視点から—」,鹿児島大学教育学部実践紀要第二十六巻,2017

(9) 井上尚美『思考力育成への方略—メタ認知・自己学習・言語論理—』(明治図書,1998,p.68-69)において、いわゆる三点ロジック及トゥルミン・モデルが紹介されている。「ペンタゴン・ロジック」は、トゥルミン・モデルから「理由の裏付け」省略している。代わりに、「協働性」「可視化」されたロジック・ツールとして提案している点に、その特長がある。

(10) 当日の様子は、平成30年8月8日付の南日本新聞記事「新聞記事で意見主張、観戦者が投票」で紹介。